'I am a cat' class 思い付く事など(1)

Junko Higasa

物事をとらえる視点

K 先生から発せられるブリリアントカットのダイヤモンドの光りは、主に鋭い政治色である。対してどこか生活感の足りない私の脳の光りは、ノンシャランスな構えの道徳色である。物事を解釈するとき、近い視点からは新たな発見は殆ど望めない。また共通の熱い思いは、時に感情に流されて誤った解釈への道を辿る危険性を孕む。したがって自分と違う視点は、冷静な判断を呼び戻す水となる。

講座を受け始めた当初の私は『吾輩は猫である』講義の政治的内容を驚きと共に受け取りながらも、元来自分の中にある心理的感覚追及の方向へ無意識のうちに歩を進めていた。加えて「吾脳はエコである」エコロジーの ECO ではなく、地道な努力のエネルギーを削減する economical のエコである。したがって結論を急ぎたがるので、解釈の泉の底に着く前に、途中の岩を到達点だと思って立ち止まる。しかしそういう状況の時、決まって頭の中は霞んでいる。「まだ違う」その思いが抜けない。それが冷静を欠いている証拠である。

そんなとき私のアンテナに触れた新聞記事があった。それはミッテラン元大統領特別補佐官で経済学者のジャック・アタリ氏の言である。氏は政治解釈の上で「歴史の大局観を説いたマルクスと、情念や暴力に繰られる人間関係を洞察したシェイクスピア」が指導者には必要だという。その言葉が、漱石という人間の「政権批判」と「シェイクスピア研究」に重なった。そして私の頭の中の「情熱と冷静」のバランスを取ってくれた。「これでいいんだ」『猫』を解釈するときには「政治・経済」と「人間心理」二つの視点が両方とも必要なのだ。人間社会なのだから。そこで頭の中の霞は一気に晴れて、左右どちらにも偏って引っ張られない出発点に戻ることができた。

我々は夏目漱石自身ではない。誰も夏目漱石という人物を 100%解釈することはできない。だからすべてを断言することはできない。しかしそこに「ある種の断言」がなければ、漱石の言葉の中から自分を発展させる物事を発見することはできない。

本は読み手によって様々な解釈を導き出す。それは時に情熱の賜物であり過ぎる。漱石の作品の内容を受け止めるための勉強は、まず誰がどの視点から見た意見を言っているかを解釈することである。政治面から、経済面から、道徳面から。それぞれの視点によって表現が違ってくるのは当たり前である。その中から表現の差に囚われない真実を見つけ出さなければならない。真実は必ず一致する。逆に一致しないのは真実ではない。これは三辺の長さが同じでないと正三角形にならない原理と一緒である。

第五章の時間中「年を取ってから勉強するのはよいことですよ」と先生はおっしゃった。年齢は追いつけないし、追い越せない。解釈も年齢と人生経験を追い越せない。年を取ってからの解釈は若いころには到達しえなかった世界である。ここにもまた分野でなく「人間として物事を捉える」という別の視点が存在する。固定的な視点から流動的な視点まで、あらゆる視点が存在するから、人間性に根差した社会背景のある文学は、消えることなくいつまでも心に残って受け継がれていくのだろう。

最後に、年を取ってから勉強する利点。頭の中がすべてα波で満たされることはボケである。だから勉強してβ波を呼び起こすことは進歩的健康維持になる。(2012.2.4)